

静岡県日中友好協議会ニュース

No. 118

2020. 3



江南地方の水郷古鎮

～東西建築文化が融合した街並み～ 南 尋

浙江省湖州市にある南尋は、上海市より西へ約120キロの所にあり、清代に栄えた水郷古鎮として名を馳せています。明代中期～清代中期にかけて、中国有数の絹織物の産地として繁栄し、生糸商をはじめとする多くの富豪が生まれました。当時の富豪は、上海に先駆けて西洋文化を取り入れた豪邸や庭園を競って建造し、現在も当時の古鎮風格建築と西洋建築の混ざった中洋折衷の街並みを見ることができます。

南尋の絹織物で財を築いた人達は「4頭の象、8頭の牛、36匹の大きな金毛の犬、72匹の小さな金毛の犬」と喩えられました。その「4頭の象」の一人、清の高官・劉鏞が造営した園林「小蓮荘」は特に有名であり、蘇州の園林が持つ精緻さを感じることができます。そのほか、張石銘の旧宅、劉承乾の蔵書楼など、江南の巨万の富を象徴する名所旧跡が多く残っています。川沿いには、全長約400メートル続く伝統的な庶民宅群・百間楼があり、江南水郷小鎮で最も良い状態で保存されています。

また、ここ南尋では、国民党の四大元老の張静江、「西泠印社」の発起人の一人・張石銘、散文家の徐遲など、多くの有名人を輩出していることから「文化の国」「詩書の郷」とも呼ばれています。

— 研修の成果と友情を携えて —

昨年9月2日に来日し、約6カ月に渡って県内の受入機関で専門研修を受けた2019年度静岡県海外技術研修員（中国研修生）4名は、2月27日、研修の成果と培った友情を携えて帰国の途につきました。



県主催の研修修了式にて
(2020年2月26日)



県 外 視 察
(左から王献文さん、林波さん、劉天然さん、孫曉清さん)

王 献文 (WANG XIANWEN) さん

- ①浙江省衛生健康委員会 医政医管薬物政策処
- ②静岡県健康福祉部
- ③医療品質と医療安全管理

* 日本で研修している間に、11の都道府県へ行き、日本の自然風景と歴史を体験しました。技術研修では、理論と実践学習により、先進的な医療衛生サービスシステム等を学び、日本の医療状況に対して、深く理解することができました。すべての日本の友達に感謝して、中日の友情が永遠に続くことを望みます。

孫 曉清 (SUN XIAOQING) さん

- ①浙江図書館
- ②静岡県立中央図書館
- ③図書館業務全般

* 研修先の静岡県立中央図書館、日中友好協議会の皆様のお蔭で、有意義に過ごすことができました。専門業務だけでなく、日本の自然環境、歴史、飲食文化、そして日本人の日常の生き方、秩序と礼儀、職場雰囲気など、身近に感じることができて、素晴らしい体験となりました。

林 波 (LIN BO) さん

- ①浙江省人民医院
- ②静岡県立総合病院
- ③日本の医療及び腎臓病診療

* 他山の石以て玉を攻むべし。日本静岡県立総合病院での勉強を通して、視野を広げただけでなく、各方面で自分の技術レベルを高めました。これは私の人生の中でとても重要な経験です。帰国後、学んだ医学技術を私たちの実情に合わせて応用し、さらに広めていきたいです。

劉 天然 (LIU TIANRAN) さん

- ①中国商務部 国際貿易経済合作研究院
- ②(一財)静岡経済研究所
静岡県立大学グローバル地域センター
- ③静岡県の経済、産業

* 発展に対する理解を、より深めることができました。発展とは、総GDPや成長率のような単純な数字ではありません。発展には、経済指標から社会的パフォーマンス効果まで、さまざまな側面が含まれます。中国は、発展途上国として学ぶべきことが、まだまだたくさんあります。

孫曉清さんの研修レポートからワンコメント

利用者の立場から考える、「心遣い」を体験

浙江図書館と静岡県立中央図書館は、2009年に友好連携関係を締結して以来、今年で10年が経ち、毎年、友好交換の形で互いに書籍や雑誌などの寄贈を通じて交流しています。

新世紀、21世紀にあって、『図書館』って、いったいどんな存在であるべきかをどう考えているのか、機能をどういうふうに生かしたらいいのか、抱えている難問をどうやって取り組んで乗り越えるか、互いの協力がもっと必要だと思いました。今回の研修をきっかけに、貴重な体験をすることができ、大変有意義でした。



社会が進化していくに伴って、健康、医療、ケア、福祉に対する住民の関心が高まり、知識の獲得と理解意欲が高まり、図書館は、社会のニーズや人々の知恵の構築により良い機能を果たすために、内部管理モードを適応させ始めています。

研修を通じて、「心遣い」、図書館にとって、利用者をどんどん呼び寄せるに欠かすことのできない力を持っていることを、日本に来たからこそ、知ることができました。また、「読み聞かせ」を知ることができました。静岡県立中央図書館のグランシップえほんのひろばで行う「読み聞かせ」という業務を研修体験させていただきました。

良い絵本はどんな絵本か、読み聞かせにはどんな絵本が向いているか、どんな感情を入れて読むのが適当か、県立中央図書館の担当の方が、詳しく説明してくれました。絵本の読み聞かせ入門に従って、中国語版と日本語版両方も出版された絵本「わにさんどきっ はいしゃさんどきっ」という絵本を選び、親子の読者さんを目の前に、私の中国語と県立中央図書館職員の日本語で、一人ずつ読んで聞いてもらいました。

絵本を通して発音やニュアンスなど言語の面白さをその場で楽しんでももらうことができ、読書は読者と本を結びつける力を持っていることを、一層実感しました。

静岡県立中央図書館と浙江図書館との交流

1998年以来、浙江省から書籍の寄贈があり、2007年には友好提携25周年を記念する交流事業の一環であらたに寄贈を受け、静岡県立中央図書館で閲覧するために排架され、また、浙江図書館の職員を海外技術研修員として受け入れました。こうした経緯から、2009年、静岡県立中央図書館は、浙江図書館との友好提携を締結し、資料の交換を行い、また静岡県立中央図書館では「浙江省文庫」、浙江図書館では「静岡文庫」として排架し、書籍の展示などの交流事業を行っています。

交 流 往 来 点 苗

春節祝賀会：200人が集い、楽しく歓談



本協議会では、毎年、関係する静岡県に在住している「異国他郷」の研修生・技能実習生を一堂に集めて、旧暦の正月（今年は1月25日）を一緒にお祝いし、相互交流と親睦を深めるために、「春節祝賀会」を開催しています。

今年は、1月26日、昨年同様に藤枝市で開催され、中国やベトナムから来ている研修生・技能実習生や受入企業の担当者、静岡県中国研修生、行政関係者など約200人が参加して、旧暦の正月を一緒にお祝いすると共に、日本語検定試験に合格した実習生を表彰しました。



技能実習生登壇して、日本語で挨拶



日本語能力試験合格者を表彰

【中国、ベトナムの旧正月】旧正月を、中国では「春節」、ベトナムでは「テト」と呼ばれ、一年の中で最も重要な日とされている祝日です。一週間の連休になり、旧正月が近づくとも人々は年越し用品を買い、この期間に帰省して、家族と一緒に過ごします。金色や赤色を基調とした「福字」や春聯（赤い紙に縁起の良い対句を書いたようなもの）を、家の門や入り口に飾り付けをして、新しい年を迎えます。中国では、餃子や餅など、盛りだくさんの食べ物が食卓に並び、街の至る所が飾り付けされ、とても賑やかであり、龍と獅の踊りや縁日などの、春節を祝うイベントが行われます。

温州と台州の産業集積地をつなく『樂清湾跨海大橋』

浙江省は「モノづくり」省として知られ、省内各地で業種毎、部品毎の産業集積が見られるといった特徴を持っています。特に温州市と台州市は産業集積の規模が大きく、種類も多く、例えば、温州市樂清市は電子部品「配電スイッチ」、台州市玉環市は「自動車部品」が大規模に集積し、また両地は地理的に隣接し、「樂清湾跨海大橋」の開通により、巨大な産業集積群の一体化が形成されました。

2018年9月28日に開通した「樂清湾跨海大橋」は全長38キロ、設計速度100キロで温州市樂清市と台州市玉環市を結び、特大橋・大橋・中橋47基、湾岸橋4基、トンネル3基の構造で構成され、建設工期は7年、総投資額は120億元です。

以前は、温州空港から玉環（約74キロ）まで約3時間かかり、途中、海をまたぐ樂清と玉環は1時間かけて、フェリーで渡船していましたが、大橋の開通により1時間に短縮され、現在では樂清から玉環までわずか20分、温州市から玉環までは約1時間で行けます。

玉環域内には高速道路が通じていませんでしたが、同時期に域内に高速道路も建設され、甬台温高速道路（寧波—台州—温州）の復線路として、樂清湾大橋が玉環市芦浦鎮分水山と樂清市南塘中枢と連絡し、寧波・舟山港、台州港、温州港と結ぶ沿海大通路の一翼を担っています。



浙江人物点描

～浙江吉利控股集团 董事長～

李 書 福



【 李書福氏 】

自動車をつくる「夢」を実現

李書福氏は、1986年に吉利集団を創立し、1997年に自動車業界に進出しました。長年にわたって実業に専念し、民族自動車工業の発展に力を入れ、技術革新と人材育成を堅持し、グローバル企業文化を構築し、企業社会の責任を守っています。その卓越したリーダーシップと展望の先導のもとに、グループは31年の繁栄を経て、6年連続で世界500強にランクされました。現在、グループ業務は自動車全産業チェーンをカバーし、全世界で10万人以上の従業員を擁し、中国に立脚し、世界に向かうグローバル企業となっています。

農民から起業、民営企業家

1963年、李書福は浙江台州の農民の家庭に生まれました。彼は四兄弟の3番目で、学生時代は台州で過ごしました。19歳で高校を卒業したばかりの李書福さんは、引き続き勉強せず。1982年、父からの120円で小さなカメラを買い、街で写真を撮る写真ビジネスを始め、半年後に1,000元を稼ぎました。その後、彼は正式に写真館を始めました。写真館を経営している李書福さんは、よく部品を買って自分でカメラを組み立てます。彼は自分で分離して取り出した金銀を杭州へ売りに行き、その後写真館を閉めて、この商売を専門にしました。

その後、1984年～1986年、浙江台州石曲冷蔵庫部品工場の工場長を担当し、1986年～1989年には、浙江台州北極花冷蔵庫工場の工場長を務めています。1989年～1992年には、浙江台州吉利裝飾材料工場の工場長を務めた後、国内の大学に進学しました。1995年から今日まで、吉利集团有限公司董事長、浙江吉利控股集团董事長を務めています。

「自動車の夢」から「教育の夢」へ

自動車の研究をするかたわら、学生を育てる。最初に「浙江经济管理專修学院」を作り、その後浙江省の豪情自動車工業学校、浙江吉利技術学院、浙江自動車職業技術学院の3つの全日制大学に発展しました。20年余りの間に自動車産業業界に23,000人余りを送り出し、多くの卒業生はすでに企業の基幹幹部に成長しています。北京吉利学院は、明確な学校運営の目的、完備した教育施設、高いレベルの教育の質を持ち、現代化建設のために多くの人材を送り込んでいます。

生活革命!!

移動に便利！タクシーアプリ「滴滴出行」

寧波大学外国語学院外籍教師
(静岡県日中友好協議会 交流推進員)

横井 香織



中国は日本とは比べものにならないくらい広く、移動に時間がかかります。中国に来て間もないころは、移動時間が長くかかることがストレスでした。中国人は、マイカーやバイクを移動に利用できますが、外国人の交通手段はバス、タクシー、地下鉄ということになります。バスと地下鉄は、駅や停留所まで行くのに、かなり歩かなければならないことが多く、タクシーは中国語でやり取りするのでそれが負担でした。そんなとき、学生に「滴滴出行」という配車アプリが便利だと教えてもらいました。

「滴滴出行」は、配車サービスの大手二社が合併し、2015年に誕生しました。現在は中国の400以上の都市で利用されています。タクシーの配車だけでなく、予約をすることもできます。

配車依頼のときは、目的地を入力すると、地図上に現在対応可能なタクシーの位置が表示されます。乗客がタクシーの車種（車のランク）を選ぶと、タクシーのナンバー、車の色、運転手の氏名のほか、待ち時間や目的地までの推定料金、推定到着時間が示されます。そのまま待っていると、表示されたタクシーが目の前にやってきます。実際の金額は、アプリ上で走行データに基づいて計算され、アプリを通じて支払います。中国語ができなくても、何も問題ありません。

初めて利用したときは少し緊張しましたが、二度三度と使って慣れてくると、便利だと思うようになりました。タクシー代が日本よりかなり安いこともあって、今ではバスや地下鉄では行きにくいところや、急いでいるときは積極的にタクシーを利用しています。

この配車アプリの利点は、配車スピードが速いこと、車種を選べること、支払いが簡単なこと、乗車前に料金や時間がわかることなどがあります。でも、運転手がどんな人かわからないので、運転が荒かったり不愛想だったりすると、なんとなく怖いと感じます。また、タクシーで事件が発生しているというニュースを見たことがあり、夜は一人で乗らない方がいいというアドバイスを受けたこともあります。それでも終バスや終電が早い中国では、タクシーを利用しないわけにはいきません。そこで私は、早朝や夜、一人で利用するときは、知り合いになったタクシーの運転手と事前にSNSで連絡をとり、お世話になることにしています。日中は滴滴出行や、最近配車サービスに参入してきた曹操出行を積極的に利用しています。便利な交通手段として、タクシーはなくてはならないものなのです。



【滴滴出行】



【配車アプリ】

～中国民間伝説～『寒山拾得』

浙江省級無形文化遺産 「寒山拾得伝説（民間文学）」は中国の天台山国清寺を舞台に寒山拾得の伝説があり、寒山は文殊菩薩の、拾得は普賢菩薩の化身といわれ、民間では「睦みあう二仙」と呼ばれていますが、寒山も拾得も、実在の人物です。日本では、蘇州・寒山寺にある釈迦像の背後に『寒山拾得図』の石刻が知られ、また森鷗外、井伏鱒二が小説『寒山拾得』、坪内逍遙作が長唄による舞踊劇を創作しています。

寒山・拾得、国清寺、舘山寺との縁

寒山は、中国・唐代に浙江省の天台山に住んでいた平民詩人。寒山には、拾得という友人がいた。拾得は、天台山国清寺で、食事の労務に従事していた行者（まだ度牒を得ていないため、剃髪の僧となっていない修行者）であった。拾得は、国清寺の豊干禪師が路傍から拾ってきて寺に住ませた。寒山は、始豊県（天台県）の西 70 里の山中にある寒巖の幽洞に住んでいたので、寒山（子）と号した。やせこけて、樺皮の冠をつけ、破れ衣に大きな木靴をひきずり、貧窮零落した風狂人のような寒山は、ときどき国清寺に来て食事係の拾得から竹筒に入れておいた残飯を貰っていくが、寺の廊下で騒いだりするので、寺僧が追い払うと、大笑して警句などをはいたりして去った。拾得も寺の護伽藍神廟に供えた食物が鳥にあらされるのを見て、食物さえ守れないお前に伽藍が守れるか、と神像を殴り倒したりする奇行で衆僧を驚かせ、「非常の人」と思われ、賢士と称されるに至った。



たまたま、台州刺史・閻丘胤が頭痛に苦しみ、豊干の治療を受けた時に、豊干から「天台山に寒山文殊、拾得晋賢なる賢者あり」と聞き、みずから登山して国清寺に至り、寺の台所でかまどの火に向って大笑している二人を見て礼拝した。寒山・拾得は手を取りあって「豊干のしゃべり」と笑い叫びながら走り去り、寒巖の隙間穴に入ってしまった。

閻丘胤は、僧・道翹とともに、寒山が竹木や石壁に書きつけておいた詩 200 余首を編纂し＜寒山子詩集＞と名づけた。この詩集は唐末宋代にかけて、風格の高い隠士の詩として盛んに伝えられ、禅僧の間にも、これを通じて禅の悟境を味わうものが少なくなかった。